目次

日本推理小説辞典

あ

蒼井雄 3　青木雨彦 4　赤江瀑 4　赤川次郎 6　赤沼三郎 8　赤松光夫 8　芥川龍之介 9　阿久悠 10　朝山蜻一 11　芦川澄子 12　飛鳥高 13　阿刀田高 14　天城一 15　鮎川哲也 15　荒正人 18　荒木十三郎 19　有馬頼義 19　泡坂妻夫 21

い

生島治郎 23　幾瀬勝彬 24　生田直親 25　井口泰子 27　井沢元彦 28　石川喬司 29　石沢英太郎 30　石浜金作 31　石原慎太郎 32　泉鏡花 33　一条栄子 34　稲垣足穂 34　乾信一郎 35　井上淳 35　井上良夫 35　岩藤雪夫 36　岩田賛 36　岩谷選書 37

う

ウインドミル 37　植草甚一 37　内田康夫 38　海野十三 40

え

エックス（X） 42　江戸川乱歩 42　エロティック・ミステリー 48　遠藤桂子 48　遠藤周作 48

お

大内茂男 49　大岡昇平 49　大倉燁子 50　大河内常平 51　大阪圭吉 51　大下宇陀児 52　太田俊夫 56　大谷羊太郎 57　太田蘭三 59　大坪砂男 61　大庭武年 62　大藪春彦 62　丘丘十郎 64　岡嶋二人 64　岡田鯱彦 66　丘美丈二郎 67　岡村雄輔 68　岡本綺堂 68　小栗虫太郎 71　鬼 74　小流智尼 74

か

海渡英祐 74　笠井潔 76　笠原卓 77　梶龍雄 77　梶山季之 78　香住春吾 80　加田伶太郎 81　勝目梓 82　加藤薫 83　加堂秀三 83　門田泰明 84　加納一朗 85

仮面 86　香山滋 86　狩久 88
川上宗薫 89　川島郁夫 89　川田功 89　川奈寛 90　川辺豊三 90
関西探偵作家クラブ 91　関西探偵作家クラブ会報 91

き
黄色の部屋 92　木々高太郎 92
菊村到 96　北方謙三 97　紀田順一郎 99　北町一郎 100　鬼怒川浩 100　樹下太郎 101　邱永漢 102

く
九鬼紫郎 103　九鬼澹 104　日下圭介 104　楠田匡介 105　葛山二郎 106　国枝史郎 107　邦光史郎 108　久能啓二 110　栗本薫 111　胡桃沢耕史 112　黒岩重吾 113　黒岩涙香 116　黒木曜之助 119　黒沼健 120　黒猫 120

け
月刊探偵 120

こ
小泉喜美子 121　甲賀三郎 122　高城高 125　幸田露伴 125　河野典生 127　小酒井不木 128　小島直記 129　小林久三 130　小松左京 132　小峰元 133　権田萬治 135

さ
斎藤栄 136　西東登 139　斎藤澪 140　酒井嘉七 141　坂口安吾 141　嵯峨島昭 143　佐賀潜 143　佐川春風 145　佐川桓彦 145　佐左木俊郎 146　笹沢左保 147　佐藤春夫 152　佐野洋 155

し
島内透 161　島久平 161　島田一男 162　島田荘司 166　地味井平造 168　清水一行 169　志水辰夫 171　Gメン 172　志茂田景樹 172　シュピオ 173　小説推理 174　城昌幸 174　白石潔 176　白家太郎 177　真珠 177　新趣味 177　新章文子 178　新青年 179　新探偵小説 182

す
推理 182　推理界 183　推理小説研究 183　推理ストーリー 183　推理文学 184　須藤南翠 184

せ
瀬下耽 185　妹尾アキ夫 186

そ
蒼社廉三 188　左右田謙 188　草野唯雄 189　曾野綾子 191

た

平龍生 192　高木彬光 193　高橋克彦 199　高橋鉄 199　高橋泰邦 200　高原弘吉 201　鷹見緋紗子 203　高柳芳夫 204　多岐川恭 206　武田武彦 212　竹村直伸 212　橘外男 213　田中早苗 215　谷恒生 215　谷崎潤一郎 216　耽奇小説 224　探偵 224　探偵・映画 224　探偵往来 225　探偵クラブ 225　探偵倶楽部 225　探偵作家クラブ 226　探偵作家クラブ会報 226　探偵作家クラブ賞 226　探偵実話 226　探偵趣味 226　探偵趣味の会 227　探偵春秋 228　探偵小説 228　探偵小説年鑑 228　探偵新聞 230　探偵と奇譚 230　探偵文学 230　探偵文芸 231　探偵よみもの 231

ち

千代有三 231　陳舜臣 232

つ

辻真先 236　土屋隆夫 237　都筑道夫 240　角田喜久雄 244　角田実 249　椿八郎 249　坪田宏 250　津村秀介 251

て

天藤真 252

と

戸板康二 255　塔晶夫 258　戸川昌子 258　伴野朗 262　豊田行二 265　トップ 266　トリック 266

な

長井彬 267　中井英夫 268　中川透 269　中島河太郎 269　永瀬三吾 270　中薗英助 271　中田耕治 274　中津文彦 276　長沼弘毅 277　中町信 278　中村花瘦 279　夏樹静子 280　楢山芙二夫 283　南條範夫 283　南部樹未子 286　南里征典 287

に

仁木悦子 288　西尾正 292　西田政治 292　仁科透 293　西村京太郎 294　西村寿行 299　西村望 301　新田次郎 303　日本推理作家協会 304　日本推理作家協会会報 304　日本推理作家協会賞 305　日本探偵作家クラブ 307　日本探偵作家クラブ会報 308　新羽精之 309

の

延原謙 309　野村胡堂 310

は
橋本五郎 311
羽志主水 312
花屋治 313
帚木蓬生 314
馬場孤蝶 314
浜尾四郎 316
葉山嘉樹 319
半村良 320

ひ
日影丈吉 322
氷川瓏 325
久生十蘭 325
久山秀子 328
火野葦平 329
秘密探偵雑誌 330
檜山良昭 330
平井呈一 331
平林初之輔 332
広瀬正 334
弘田静憲 335

ふ
福田洋 335
福本和也 337
藤木靖子 339
藤村正太 340
藤本泉 341
藤雪夫 343
フーダニット 344
船戸与一 344
冬木喬 345
ぷろふいる 346

へ
別冊クイーン・マガジン 347
別冊宝石 347

ほ
宝石 348
星新一 350
保篠龍緒 351
本田緒生 351
本間田麻誉 352

ま
牧逸馬 353
松本清張 355
松本泰 368
丸亭素人 369

み
三浦朱門 370
水上呂理 370
水田南陽外史 371
水谷準 372
三津木春影 375
密室 375
三橋一夫 376
水上勉 377
皆川博子 380
南沢十七 382
宮野村子 382
宮原龍雄 383
三好徹 384

む
村山槐多 389

め
女銭外二 391

も
森下雨村 391
守友恒 392
森村誠一 393

や
八重野潮路 399
山下平八郎 399
山下利三郎 399
山田風太郎 400
山村正夫 406
山村美紗 408
山本周五郎 410
山本禾太郎 411
結城昌治 412
夢座海二 418
夢野久作 419
由良三郎 422
横溝正史 422
米田三星 435

よ
妖奇 422

ら
蘭郁二郎 436

れ
麗羅 437
連城三紀彦 438

ろ
ロック 439

わ
和久峻三 440
鷲尾三郎 442
渡辺温 443
渡辺啓助 444
渡辺剣次 446

リ　リーヴ Arthur B. Reeve　684　リード アンブラーを見よ　685
ル　ルヴェル Maurice Level　685　ル・キュー William Tufnell Le Queux　687　ルブラン Maurice Leblanc　688　ルルー Gaston Leroux　691
レ　レイシイ Ed Lacy　694　レヴィン Ira Levin　695
ロ　ロス クイーンを見よ　696　ロースン Clayton Rawson　696　ローゼンハイン Paul Rosenhayn　698　ロックリッジ Frances & Richard Lockridge　699　ロード John Rhode　700　ローマー Sax Rohmer　702　ロラック E. C. R. Lorac　702　ロレンス Hilda Lawrence　703　ローンズ Belloc Lowndes　704
ワ　ワイルド Percival Wilde　705

解題　野村恒彦　707

項目索引
（日本推理小説辞典、海外推理作家事典）　738

日本推理小説辞典

あ

蒼井　雄　あおい・ゆう

本名藤田優三。明治42年1月27日、京都府宇治に生まれ、五歳から大阪に移る。昭和2年3月、大阪市立都島工業学校電気科卒業。ただちに宇治川電気に入社、以後再編成によって関西配電、関西電力となり同社に勤務。

昭和9年9月、「狂燥曲殺人事件」を『ぷろふいる』に発表。春秋社の書下し長編募集に一席入選の「船富家の惨劇」（別項）を昭和11年に刊行した。海外作品を消化して、アリバイ打破を中核にした本格長篇は戦前のすぐれた収穫である。

続いて長篇「瀬戸内海の惨劇」（昭11―12、ぷろふいる）は、先の長篇に活躍する探偵南波喜市郎が、内海遊覧船で美しい眺めを楽しんでいるとき、島の頂きに烏についばまれている女性の死体を発見する場面から始まる。捜査本部で犯人と睨んだ人物が、つぎつぎに死体となって出現する変転のはげしい作品で、作者一流の粘り強い追及が重厚な感銘を与える。因縁譚的要素と、しいて複雑化した構成に、前作ほどの意外性が欠けているのは惜しい。

他に中篇「霧しぶく山」（昭12、探偵春秋）、「黒潮殺人事件」（昭22、新探偵小説）などがあるが、24年からは筆を絶った。昭和50年7月21日、心臓発作のため死去。遺稿に長篇『灰色の花粉』がある。

【船富家の惨劇】昭和11・2、春秋社刊。南紀の旅館に船富夫妻が泊ったが、妻は惨殺死体となって発見、夫の隆太郎は殺害後死体を運び去られたらしい惨事が突発した。娘の縁談の相手滝沢が被疑者と見られたが、大阪の元捜査課長南波喜市郎が弁護士に依頼されて奔走し、隆太郎と共犯者による犯行を推定し、隆太郎と思われる死体を熊野山中でみつけた。

さらに船富の娘が殺され、またも容疑は滝沢に向けられた。その上、共犯者と思われる人物も御岳山で毒殺されており、南波の推理はすべて覆えされた。事件が完全に迷宮入りを伝えられたとき、登場したのが赤垣滝夫、国家を背景にした秘密探偵である。

赤垣は南波に向かって、根本的な観察の誤りがあると指摘した。犯人の残した犯跡を拾いあげて、犯人の計画した通りの推理を組立て名探偵の役を演じたのが南波だといい、もっとも安全地帯にいる犯人を指名する。

フィルポッツの「赤毛のレドメイン家」と、クロフツの「樽」の影響を受けているが、犯罪計画が克明で、紀州・大阪・木曾を舞台にしてスケール雄大、風景描写に迫真性がある。戦後の河出書房版で稿を改め、アリバイ工作に考慮が払われ、その打破に力点をおいた。現実派的作風をもっとも早く咀嚼して採り入れた長篇として、大きな足跡を残した。

青木雨彦　あおき・あめひこ

昭和7年11月17日、神奈川県生まれ。30年、早稲田大学文学部卒業。コラムニスト、評論家として、「事件記者日記」「昭和ヒトケタ社員」「男の仕事場」などがある。

「夜間飛行」（昭45―48、ミステリ・マガジン）は、「ミステリについての独断と偏見」という傍題があるが、軽妙洒脱にミステリの楽しさを語り、「課外授業」（昭49―51、ミステリ・マガジン）は、「ミステリにおける男と女の研究」という傍題があって、ユニークな恋愛論をまじえながら、海外作品の味読に示唆を与える好著である。後者により54年、第31回日本推理作家協会賞の評論その他の部門賞を受賞した。〔平成3年3月2日、死去〕

赤江　瀑　あかえ・ばく

本名長谷川敬。昭和8年4月22日、山口県下関市に生まれた。日本大学芸術学部中退。ＮＨＫで

脚本家として活躍したが、明治百年記念演劇脚本応募の歌舞伎台本「大内殿闇路」が最終審査に残り、その力量を評価され、小説執筆を決意した。

昭和45年、天才舞踊家ニジンスキーの再来と謳われた日本人舞踊家の数奇な運命を描いた「ニジンスキーの手」により、第15回小説現代新人賞を受賞。49年の『オイディプスの刃』（角川書店）は、夏の日に大迫家で起った惨劇を扱っている。名刀次吉を所蔵する当主には先妻の子明彦、主人公駿介を連れて後妻となった香子、後妻の間に生まれた剛生と、出戻りの妹雪代の六人がいる。毎年訪れる研師泰邦が香子を恋しながら、雪代と戯れているのを、駿介が覗き見た翌日、彼が昼寝から目ざめてみると、泰邦は名刀で死に、明彦と剛生は罪をなすりあう。香子も父も自殺し、子供たちは離散した。

その後十二年、母と同じように調香師になった明彦は、切角発明した新種なのに、世界一の調香師デュロンの弟子の日本人に鼻をあかされる。この日本人は顔形を変えた剛生で、この二人のすさまじい葛藤にからんで、泰邦の死の真相が明らかにされ、新たな悲劇が待ち構えている。名刀と調香という時代的には対照的なものを素材にし、母子、兄弟間の愛情憎悪を鋭く抉り、昭和50年、第1回角川小説賞を受賞した。

「上空の城」（昭51、野性時代）は、眉彦が信州の松本城で世古蛍子に出会ったことにはじまる。彼女が黒々とそびえる天守を放心したように眺めていた姿を目にとどめた眉彦は、姫路城で出会ってことばを交わし、次第に愛情が芽ばえた。

彼女は幼いとき描いた真っ黒な城の絵を見せ、どこかに必ず存在すると言い張る。とうとう西中国の山地にある寺で、忍びの絵師の写した城廓図を封じこめた経緯を説かれ、蛍子の幻影のルーツを知る。伝奇的色彩を背景にして、ひたむきな愛を描いている。

「妖精たちの回廊」（昭和55、別冊婦人公論）は、錦鯉飼育業者の失踪の謎を追及するうち、連続殺人が起こり、錦鯉の世界に次第に深入りする青年の苦悩と友情を主軸にしている。絢爛たる美の開

発に心魂を傾けるものの俠気のもたらす悲劇が痛ましい。

「風葬歌の調べ」（昭56、週刊小説）は、古代ギリシャ展で見た四足獣形の魔除にそっくりの飾りをつけていた画家が、京都の裏山で死体となって発見されたとき、その飾りがなくなっていたので、その謎を追及するホテルのフロントマンが主人公である。

女流随筆家と女性建築家の対立に、主人公は振り回されながら、美女の翳の部分に直面する。首飾りと画に魅せられたため、主人公は思いも寄らぬ深淵を覗きこむ羽目になる。

赤江の夥しい短篇はそれぞれ素材を吟味し、華麗な蠱惑の世界に誘いこむ。耽美妖異の作風は追随を許さない。『日本風景論』の一冊として書かれた『海峡』と、『八雲が殺した』（昭59、文芸春秋）により、59年、第12回泉鏡花文学賞を受賞した。〔平成24年6月8日、死去〕

赤川次郎　あかがわ・じろう

昭和23年2月29日、福岡県に生まれた。桐朋学園高校卒業後、日本機械学会に勤務。

昭和51年に「幽霊列車」（オール読物）により、第15回オール読物推理小説新人賞を受賞した。列車の乗客八人がそっくり消失する謎は、事件の動機が奇抜であり、探偵役に好感がもてることが成功の原因であった。風采のあがらない、やもめ四十男の刑事と、天衣無縫の女子学生との推理コンビは、この第一作以後連作探偵譚を生んだ。ユーモラスな作風の背後に無気味さとスリルを秘めた短篇は、『幽霊列車』（昭53、文芸春秋）、『幽霊候補生』（昭54、同上）などに収録されている。

これらの連作に着手する以前に刊行された第一長篇『マリオネットの罠』（昭52、文芸春秋）では、甲州の西洋館に幽閉されていた美少女を、家庭教師が同情して逃がしたために起こる連続殺人を扱っている。メルヘン的な舞台装置で、悪夢と現実の間を微妙な平衡を保って生きてきたと自己を振り返る少女の深層心理を抉りだし、サスペンス小説風に見せかけて、作者は意外性においてもすぐれた効果を収めている。

海外推理作家事典

ア

アイアムズ（ジャック）Jack Iams

アメリカ作家。一九一〇年に生まれ、一九三八年にNowhere with Musicを発表し、ユーモア作家として知られている。アメリカのP・G・ウッドハウスと呼ばれている彼は、一九四七年にはじめてユーモア推理小説のBody Missed the Boatを発表してから、ユーモア小説と推理小説の両分野にわたって作品を刊行している。「のぞかれた密」A Corpse of the Old School（一九五五年）は、私立中学校の寮で起った二人の生徒の失踪事件を扱っている。一人は素行不良の少年で、このほうには身代金請求があり、他のおとなしい少年にはなんの音沙汰もない。前者の側からは母親と、その弁護士の派遣した私立探偵、後者の側からは新聞の社交欄主任の老嬢が、それぞれ学校に乗りこむと、さらに舎監の教師が殺害され、その死体が消失する。

私立探偵は右往左往するだけの能なしで、かえって老嬢が毅然として、秘密の核心をつく。

会話や行動の端々で読者をくすぐろうとする、チャチなユーモア物と異なって、作品全体にほのかなユーモラスな趣向を漂わせているのが、後味をよくしている。〔一九九〇年一月二七日、死去〕

アイリッシュ（ウィリアム）William Irish

アメリカ作家。戦後紹介された新作家のうちで、もっとも早く、もっとも華々しく迎えられたのが、このアイリッシュであった。

彼は本名をコーネル・ジョージ・ハプリイ・ウールリッチCornell George Hopley Woolrichといい、一九〇六年一二月四日にニューヨークに生まれた。少年時代は両親と一緒にメキシコに住んでいたので、一九一〇年から二〇年にかけて、この国の革命騒ぎの慌しい空気に触れている。

ニューヨークに帰ってコロンビア大学に入学し、一九二五年に卒業した。その年病気にかかり、回復期のつれづれに書物を読みあさり、自分でも執筆する気になった。処女作の Cover Charge を刊行したのは一九二六年だから、二十歳の時である。翌年には Children of the Ritz を著わし、コロンビア大学の College Humour 賞の一万ドルをもらった。ダンサーにでもなろうかという漠とした望みが、作家として立つ覚悟に変わり、その後さらに、三冊の推理小説でない作品を書いた。

推理小説の方面では、一九三二年からハードボイルド派の雑誌「ブラック・マスク」などに寄稿していたが、一九四〇年に長篇「黒衣の花嫁」The Bride Wore Black を発表した。恋人を殺された女性の復讐を描いたもので、サスペンスに溢れていた。

その二年後、これまでのコーネル・ウールリッチの筆名とは別に、ウィリアム・アイリッシュ名義で、「幻の女」Phantom Lady を刊行した。細君を殺した嫌疑で死刑を目前に控えた男が、自分のアリバイを立証してくれるはずの女性を探すが、皆目手がかりがない。異様なサスペンス、心理的スリル、結末の意外性など、一読忘れ難い深い印象を留める佳作である。これが好評を博して流行作家となったが、さらに本名の中ほどをとった筆名ジョージ・ハプリイを用い、この三つを使い分けて、だいたい年一作の割の長篇と多くの短篇を発表している。

アイリッシュの別名を使用したのは、アメリカの出版上の慣例によるもので、一作家は同一出版社から刊行するため、他の出版社と契約した場合、別の名義を採ったのである。

ウールリッチは「ブラックのウールリッチ」と呼ばれたほど、題名に「ブラック」を挿入した。すなわち「黒衣の花嫁」以後、「黒いカーテン」The Black Curtain（一九四一年）、「黒いアリバイ」Black Alibi（一九四二年）、「黒い天使」The Black Angel（一九四三年）、「恐怖の冥路」The Black Path of Fear（一九四四年）、「喪服のランデヴー」Rendezvous in Black（一九四八年）があるが、その後はこれに拘らなくなった。

「暁の死線」Deadline at Dawn は、アイリッシュ名義の長篇第二作として、一九四四年に刊行さ

れた、原題は新聞の早版の締切時間を意味するが、同時に殺人容疑者にされかねない窮境を兼ねているものと思われる。

夜明けまでの僅々五時間ほどの間で、どうしても犯人を突きとめなければならぬと決意し、フルに頭脳を働かせ、精一杯動き廻る緊迫したサスペンスは独特の味がある。各章のはじめに、時計の文字盤を掲げて、刻々と迫る時間の経過を示した着想にも、焦燥感の盛りあがりを狙った作者の意図が成功している。

彼は恐怖とサスペンスを描く名手といわれた。本格的な謎解きを避けて、窮地に陥った人々の切迫した心理をこまかに写した。緊迫した人間の運命のひとこまに焦点を合わせながら、それらの醸しだす蕭条とした雰囲気を見事に再現している。心理と情景とがそのまま一体となっているのが、彼の無類の特色といえよう。

「幻の女」は純粋の推理小説として、比較的に成功している作品であるが、一体にこまかい分析に拘泥せず、サスペンスで一貫しようとする。そのために主人公も窮境にあるものに設定され、はげしい愛情とわびしい孤独感に充たされている。アメリカの作家には珍しいこの情緒的な作風はユニークなもので、いわば日本人好みの感傷性に通ずるものがある。彼がたちまちわが国に受け入れられ、ほとんどが訳出されるほどの強固な支持を得た理由は、ここにも見出せよう。

推理作家で二つ以上の筆名をもつものは相当に多いが、彼もその一人であった。ウールリッチ名義で発表した短篇を単行本に収めた際、アイリッシュ名義で出したので、同一人であることがはっきりした。殊に彼は自己の身辺を語りたがらないから、はっきりしない点があるが、独身で母親と二人、ニューヨークのホテル住まいをしていた。

彼は「死刑執行人のセレナーデ」Strangler's Serenade（一九五一年）を最後にして、七年ほど長篇の筆を休めていた。その間に出たのは旧作を集めた短篇集ばかりで、なにをしていたか明らかでない。

解　題

野村　恒彦

『中島河太郎著作集』は全二巻で構成されるが、上巻である本巻には「日本推理小説事典」と「海外推理作家事典」を収録した。続いて刊行される下巻には、著者の探偵小説及び民俗学関係のエッセイで単行本未収録作品を中心に収録することとしている。なお、中島河太郎の経歴や著作全体の評価については、下巻の解題で書きたいと考えている。

中島河太郎が探偵小説の分野で情熱を傾けたものとして、探偵小説を歴史的に把握するという視点からの海外探偵小説史、それらと関連付けられた日本探偵小説史、国内外探偵小説を主題にした辞典類、探偵小説に関する年表、そして個別作家の作品目録や著作目録がある。

しかし中島河太郎の探偵小説に関わる最大の興味は探偵小説全体を掌握するための事典編纂であった。その証拠として最初の大きな業績は「宝石」に連載された「探偵小説辞典」がある。この辞典により、第一回の江戸川乱歩賞を受賞することとなったのは、周知のとおりである。その後著者が編纂した辞典関係は四つあり、年代順に並べると次のようになる。

探偵小説辞典　「宝石」連載（昭和二十七年～三十四年）　講談社文庫（平成十年）所収
海外推理作家事典　『推理小説展望』東都書房（昭和四〇年）所収

推理小説事典　『ミステリ・ハンドブック』講談社（昭和五十五年）所収
日本推理小説事典　同題の単行本所収　東京堂出版（昭和六〇年）

この四つの辞典・事典のうち「日本推理小説事典」と「海外推理作家事典」が国内作家と海外作家を対象とした最終版であるため、これが二つの事典を本巻に収録した理由である。

また、先に列記したように『ミステリ・ハンドブック』に収められた「推理小説事典」が最初の「探偵小説辞典」と「日本推理小説事典」との間に刊行されているが、この「推理小説事典」にも当然のことながら言及しておく必要もあるだろう。

次に収録した二種の事典の解題に移るが、まずそれらの原型となった「宝石」連載の「探偵小説辞典」について書くことにし、そしてその後に、「日本推理小説事典」及び「海外推理作家事典」について書くことにしたい。

これら辞典・事典について述べる際に注意しておきたいことがある。それは事典そのものが単独で刊行されたわけではなく、他の収録作品と一体となった著作であるから、まずその著作の内容を紹介して、その後に事典の位置付けを行うつもりである。

また当然のことながら両事典の刊行時期が昭和四〇年と昭和六〇年であるため、現時点では情報が相当に古くなってしまっている。これらの情報を更新すべきではあるが、そうすると著者が執筆した内容の更新まで至ることになり、大きな変更を余儀なくされてしまう。中島河太郎の著作という観点から更新するのは没年の追加のみにとどめ、最低限のものとした。

探偵小説辞典

著者の『探偵小説辞典』は画期的な著作である。昭和二十七年から三十四年という発表された年

しかし「探偵小説辞典」が完結した昭和三十四年二月号の「宝石」の編集後記で江戸川乱歩は次のように記していることから考えて、単行本として刊行される予定があったことがわかる。これが何故実現しなかった理由は、後述する『日本推理小説事典』の自序にあるように、種々の障害や増補追加の煩雑さがあったのだろうが、今となってみれば不明である。

七年にわたって連載された中島河太郎さんの「探偵小説辞典」が完結した。この労作には脱帽のほかはない。完結祝賀会を開きたいものである。これは訂正増補の上、たぶん東京創元社から一冊として出版されるが、その日を待ち遠しく思っている。

さて、その「探偵小説辞典」の内容であるが、先に述べた1から3の三点から検討していくことにしよう。まず1から始めることにする。「探偵小説辞典」は昭和二十七年に連載が開始されているが、現在から考えればこのような辞典を企てるなど明確に無謀な試みである。「探偵小説辞典」完結時の「宝石」昭和三十四年二月号に掲載された「後記」によれば、「本稿は元来、愛好者の便宜のために編むつもりであった」とある。この意図するところは、既に刊行されていた江戸川乱歩の評論集『幻影城』（岩谷書店　昭和二十六年）とは一線を画すものであるということである。ここで最も重要なことは『幻影城』のような評論書は新しい知識を取り入れ網羅する必要はないが、本書のようなハンドブックを企図したものは絶えずアップデートを行っていく必要があるということである。このことは後で詳述する。

2については作者名、作品名、叢書名、用語と混在した項目立てとなっており、その項目の選択の基準のあり方でとまどわれるかもしれない。しかしその基準をハンドブックを作成するということにあてはめれば、納得がいくだろう。

「探偵小説辞典」の内容であるが、そこには三百八十三の項目が設定されている（そのうち九項目

［著者］

中島河太郎（なかじま・かわたろう）

1917年6月5日、鹿児島県生まれ。本名・馨（かおる）。東京帝国大学文学部国文科卒業後、1942年より東京府立第七中学校（都立墨田川高校）で教鞭を執る。民俗学に精通し、柳田国男や正宗白鳥の研究者として多大な功績を残した。1948年に『探偵新聞』へ連載した「日本推理小説略史」が江戸川乱歩の目にとまり、以降、推理小説評論家としても活躍する。1966年に和洋女子大学へ赴任し、学長退任となる1996年まで同大で教育者として従事した。1997年、日本初の推理小説専門図書館となるミステリー文学資料館の初代館長に任命された。1999年5月5日、腎不全により死去。1955年に「探偵小説辞典」で第1回江戸川乱歩賞、1966年に「推理小説展望」で第19回日本推理作家協会賞、1998年に第2回日本ミステリー文学大賞を受賞。1988年、勲四等旭日小綬章受章。

［編者］

中嶋淑人（なかじま・よしと）

1949年6月1日、東京都墨田区生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業後、1975年より2007年まで株式会社大林組に勤務。2008年より株式会社ジョイネス代表取締役。文藝家協会準会員。

なかじまかわ たろうちょさくしゅう じょうかん
中島河太郎著作集　上巻

2020年1月20日　初版第1刷印刷
2020年1月30日　初版第1刷発行

著　者　中島河太郎
編　者　中嶋淑人
装　訂　宗利淳一
発行人　森下紀夫
発行所　論 創 社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254　FAX:03-3264-5232　振替口座 00160-1-155266
WEB:http://www.ronso.co.jp

印刷・製本　中央精版印刷
組版　フレックスアート

©2020 Nakajima Yoshito, Printed in Japan
ISBN978-4-8460-1883-2
落丁・乱丁本はお取り替えいたします